

# 裴子野「雕蟲論」考證

——六朝における復古文學論の構造——

林田慎之助

六朝の梁の時代、其の文壇にかなりの影響力を残した文學者は、韻文では謝靈運、散文では裴子野であった。宮體詩の提唱と玉臺新詠の編集によって、六朝文學の最終美をかざる事になった梁の簡文帝は、自己の文學集團の美意識の確立にあたって、この二人の文學存在と、その足跡を無視することができずに、かれらを、あきらかなる文學批判の射程距離にすえている。簡文帝の「湘東王に與うる書」が、それである。

時に謝康樂・裴鴻臚に効<sup>な</sup>る者あるも、亦た頗る惑えるは、何ぞや。謝客は吐言天拔し、自然に出ず。時に拘らざる有るは、是れ其の糟粕なり。裴氏は乃ち良史の才なるも、了に篇什の美なし。是が爲に、謝に學びて則ち其の精華に届かず、但だ其の冗長を得るのみ。裴を師とするも則ち其の長ずる所に蔑絶し、惟だ其の短<sup>た</sup>き所得るのみ。謝は故より巧みなれど階<sup>のほ</sup>るべからず。裴も亦た質なれど慕うに宜しからず。

これからみても、當時謝靈運・裴子野の文體を模倣する二つの文學エコールがあつて、もつぱら、そのエビゴーンへの否定的批判によつて、この書簡の文學批評はつらぬかれてゐる。梁代における謝靈運の文學距流の實態を、あきらかにする資料をここであげることが、控

えることにして、裴子野を頂點として形成された文學集團の性格、それをささえた思想の構造をみきわめるのが、拙稿のねらいである。そのために、裴子野の家系と生活の素描からはじめ、その思想的系譜を范頴との關係でとらえ、文學集團の人的構成を復元することにすることが、なかでも、裴子野の文學觀をみる事ができる「雕蟲論」一篇の制作年代について、從來の定説、例えば、鈴木虎雄氏、羅根澤氏などの説に訂正をせまる必要を感じるので、その考證に力點をおくことにした。そのことによつて、六朝文學批評史において、きわめて特色のある復古文學論の發生構造と、その位置づけに、より正確な照明をなげかけることができれば、それで幸いである。

## a 裴子野の家系と生活

裴子野は字を幾原といい、河東聞喜、今の山西省平陽府の出である。裴氏の家系は代々儒者或いは史官として世に立つており、子野の曾祖・裴松之は、陳壽の「三國志」に、精密嚴正な注釋をほどこして著名である。子野は幼いころに、母をうしない、その後九歳に至るまで、もつぱら母方の祖母殷氏の掌で養育されることになる。殷氏はた

い好學の少年に育てている。父の昭明は齊の通直散騎常侍となつてゐるが、子野が起家してほどなくしてなくなつてゐる。

若い時分から、裴子野は相當の硬骨漢であつたとみえる。それは、時の文名高き權勢家、任昉の不興をかつた一事を史書がつかえてゐるからである。梁の天監のはじめ、任昉のもとには、彼の盛名を慕う後進が雲集し、それぞれ彼の推擧を受けていたが、そのとき、子野は任昉の姻戚關係にあつたにもかかわらず、獨りだけその門下に寄りつかなかつたがため、却つて任昉に恨みを抱かせてゐる。裴子野の傳記からみるかぎり、彼自ら聞達を求めたり、積極的に自己を推し出すという處生態度はみられない。任昉との一件にしても、裴子野の態度によつては、思いのままに任昉の推挽をうけることが可能な距離にあつたはずである。それまで、彼は歴史家の家系につながるものによさわしく、續裴氏家傳二卷、抄合後漢事四十卷、さらには、のちに彼自身の歴史家としての稟質を世にとつことになる「宋略」二十卷をあらわしていた。とすればこれらの仕事をてがかりに、姻戚關係にあたる任昉の推擧をもとめるぐらい容易なことであつたにちがいない。それにもかかわらず、裴子野自ら任昉につくことをさけてゐる。このことは、世の人々が聞達の路をもとめて、權勢に媚びるとき、獨りその圏外にあって、おのれを持する硬骨漢には、自己の内にたのむものが自覺されてあつたと思われる。そう考えなければ、寄りつかないという理由で、任昉が逆にうらんだということが納得できかねることになる。

裴子野が廷尉正となつた天監の初年のころ、奏上された獄牒のなかに間違ひが発見され、その獄牒には、廷尉正裴子野の署名があり、その責を負うて彼は即刻に免職になる。實際は、彼が不在のおりに、同僚がその名を書して奏上に及んだもので、彼には罪はなかつた。それ

を知る者が、事情を有司に申し出て咎をうけないようにしてはとすめたが、子野は笑つて、「直道を守つたあの柳下惠の故事に慙じるにしても、訴えるまでのことはあるまい」といつて、いっこうに人をうらむ氣配はなかつたという。

ここにも、積極的に自己の非運を切りひらく態度はみられない。唯自分を知らぬもののみのもつ達觀だけがのぞいてゐる。

このような裴子野が歴史家としての存在價值を世に知られ、彼の生涯の事蹟が史書にぎざまれるようになる運命は、或る偶然の機會によつてもたらされてゐる。それは、裴子野の生活態度と其の隠れたる仕事を、祕かに聞知してゐた中書郎・范縝が天監七年國子博士に任ぜられたおり、梁の武帝に、かわりに裴子野を推擧したい旨の上奏文を差出してからである。この上奏文により、裴子野の「宋略」二十卷の存在は、俄然、世の脚光をあび、「宋書」の著者であつて、時の顯官、沈約の心膽を寒むからしめることにもなる。かくして「宋略」を讀んだ吏部尙書、除勉の進言を経て、彼は著作郎掌國史となり、以後、それまで蓄積してきた該博な知識を活用する公の舞臺を得て、漸次、梁の朝臣として重きを加えてゐる。やがて中書侍郎に拔擢され、大通六年に鴻臚卿を拜してゐる。

梁書の傳記は、裴子野の人柄とその生活態度を傳えて、つぎのように記してゐる。

子野、禁省に在ること十餘年、靜默自守して、外表及び中表を請謁することあらず。貧乏あれば、得る所の俸給ごとごとく分給す。宅無ければ、官地二畝を給わり、茅屋數間を起す。妻子恒に飢寒に苦しむも、教誡を以て本と爲すのみ。末年、深く釋氏を信じて、其の教誡を持し、終身麥を飯い蔬を食す。中大通二年官に卒す。年六

十二なり。

この記録は、自己とおのれの家族にたいして、ストイックなまでの倫理観を保持することで、他者に可能なかぎりの愛を注ぐ一人の人間の生き方が示されてある。これはまぎれもなく、儒教の倫理が生身の人間のなかに、顕現化されてあることの記録である。かかる生き方は、華美を競った南朝の貴族、官僚のなかにあって、たしかに異質なものであり、そのことが、そのまま、君子の志を表現し、四方の風氣を反映したものでこそ、詩であるとする古代詩觀の復活提唱となつて、裴子野の文學論に結晶することになる。

## b 宋略と雕蟲論

范縝が裴子野を國士博士に推擧した上奏文は、現在、梁書裴子野傳にのこつており、それを見るとつぎのようなことばではじまつている。

伏して見るに、前の冠軍錄事、河東の裴子野、年四十、字は幾原。幼くして至人の行を稟け、國士の風に勵む。家業は世々儒史、經籍に苑囿し、文藝に遊息す。宋略二十卷を著し、首尾彌く論め、一代を勅成す。屬辭比事觀るに足る者有り。且つ章句洽悉し、訓故傳うべし。

現在「宋略」二十卷はほろんでゐるが、その總論一條、樂志序一條の他、「宋略」に屬するものとみられる選舉論三條、泰始三板論一條、明帝誅諸弟論一條が、「通典」「文苑英華」「資治通鑑」に残つており、「太平御覽」にはその斷簡六條をとどめている。それに加えて、唐の劉知幾の「史通」から「宋略」に關する貴重な論評を拾へるといふ利點もあり、これらをはかりに、ほぼ「宋略」の體裁、内容、敘事文章の概要を推測することができる。

劉知幾の指摘によれば、「宋略」の體裁は、列傳體ではなく、春秋左氏傳にならつて、編年體をとつており、その敘事文章の點でも、あきらかに、左傳を祖述していたとみられ、その例證のいくつかを、「史通」はあげてゐる。「史通」そのものが、唐代の文學批評史の上では、きわめてユニークな存在として、採り上げられるだけであつて、劉知幾は歴史史書の敘事文章に細心の注意をはらつてゐる。その彼が「史通」卷六敘事の篇に敘事文章のすぐれた歴史書として推賞するのは、裴子野の「宋略」と王邵の「齊志」である。

近くは裴子野の「宋略」、王邵の「齊志」、此の二家は並びて敘事に長じ、古人に愧ずること無きなり。而るに世人議して皆雷同するは、裴を譽めて共に王氏を詆る。夫れ江左は雅を事とし工を專にする所以なり。中原跡穢、其れに由りて屢々鄙なり。且つ幾原は虚飾の詞に務む。君愨（王邵）の志は實錄に存す。此れ善惡異なる所以なり。

この批評において、興味ぶかいのは、かつて梁の簡文帝が、篇什の美なく質朴にして慕うにたりないとした裴子野の文章に、なお江南の雅なる文風に染まり、實錄の文章にそぐわぬ虚飾の言葉があると指摘していることであり、ここにまぎれもなく、裴子野を對象として、全くちがった見方があらわれており、その意味でも、これは、南朝と唐の時代の文章論の落差を感じさせる恰好な資料である。そうは云うものの劉知幾は、歴史書の敘事文章には蛇足が多いが、この缺點をまぬかれてゐるのは、十の内一二、唯、左丘明、裴子野、王邵あるだけだといふ。そのためか、「史通」卷一七の宋略一條によると、此の「宋略」は「繁を芟り要を撮る。實に其の力あり」とのべ、「裴氏のごとき者は衆作中、ともに史を言うべき者なり」とも批評しており、春秋、

史記以來、六朝唐初にかけて出現したおびただしい史書のなかで、「宋略」は力作であり、裴子野は歴史家として共に語るにたる存在であると、劉知幾の論評はおおむね好意的である。

「宋略」という書名は云うまでもなく、劉宋の時代史の要略といふほどの意味である。正史としての「宋書」が沈約等によって編纂され、奏上されたのが、齊の永明六年（四八八年）のことであり、時に裴子野は二十一歳であった。この「宋書」の出現をみて、それまで曾祖裴松之が搜集していた資料のうち、「宋書」と重複したり、浮淺で信頼のおけぬもの、繁雜にわたる部分をきりすてて、二十卷にまとめたのが「宋略」である。今にのこる「宋略」總論のなかで、裴子野みずから「宋略」成立の事情をつぎのように、分明にしている。

子野の曾祖、宋の中大夫西郷侯は、文帝の十六年詔を受け、元嘉起居注を撰ぶ。二十六年重ねて詔を被むり、何承天の宋書を續成するも、其の年に位に終れば、書するに則ち未だ遑あらず。齊興りて後數十年、宋の新史（宋書）世に行はる。子野泰始の季に生れ、永明の年に長ず。家に舊書有り、聞見又接す。是を以て浮淺を用ひず。新史に因つて宋略二十卷を爲る。繁文を剪截し、事を要を刪撮す。其の簡要に即けば、志して以て名と爲す。夫れ惡を黜け善を章かにして、臧否與奪は先進の格言に則り、私を有するに非ず。

この「宋略」が衆目の注視をあびる契起となった范縝の上奏文に、裴子野四十歳とあるから、その時は、梁書に記す裴子野の卒年、中大通二年（六十二歳、五三〇）から逆算すれば、天監七年（五〇八）となる。したがって「宋略」はすくなくとも、天監七年にはすでに完成していたことになる。さらに右にあげた「宋略」總論から推測すれば、沈約の「宋書」がかかれた永明六年（四八八）以降、齊の末年、

ほぼ四九〇年代に、その制作年代をおいてさしつかえあるまい。

この他、この總論から察せられることは、先行することになった沈約の「宋書」にたいする不滿と批判が、この「宋略」制作の直接的動機となつてゐると思はれることである。その具體的な裏付けを、「南史」の裴子野傳は提供している。それは、沈約の祖父にあたる沈璞が殺戮された事件に關するもので、沈約が「宋書」において私情をはさみ、好意的な記述をおこなつたことについてである。これに關しては、すでに劉知幾が「史通」卷七曲筆の篇で、痛烈に沈約を批難しており、それによれば、沈約が「宋書」を編纂したとき、裴松之の孫はわからなくなつたと書いたが、裴松之の曾孫裴子野は別に「宋略」を書き、沈約の祖父沈璞が殺されたのは叛逆追討の義軍に加らなかつたからだと言したので、沈約は謝り、ともに書きなおしたといふのである。劉知幾はこれなど、私情による曲筆の典型的な例であるとして、全く歴史家の風上におけないと論じている。このように「宋略」が「宋書」における曲筆の事實を指摘していることは、「宋略」という題名にもかかわらず、その意圖するところが、現に正史としてまかり通つている「宋書」に訂正をせまり、それを補筆せんとすることであつたことはあきらかである。

現在、「通典」の選舉の項には、この「宋略」に屬していたとみられるものが三條のこつてゐる。清の嚴可均の「全梁文」は、その内二條を宋略選舉論と題しているが、他の一條だけは、單に雕蟲論と名づけ、八通典には選舉論と作す、と注記して收めてゐる。この一條だけを雕蟲論としたのは、「文苑英華」にしたがつたのであつて、「文苑英華」卷七四二に、李華の「質文論」、顧況の「文論」、牛希濟の「表章論」などととも、これが八論文の項にくくられて、雕蟲論の題名

のもとに、獨立した文章論としてあつかわれているからである。

劉知幾の「史通」の論評から、「宋略」が編年體の記述方法をとっていたことはわかるので、「通典」が宋略樂志序となし、「文苑英華」が宋略總論として明記して收めているもの他は、嚴可均の「全梁文」のように、「宋略」の中で選舉論、泰始三叛論、明帝誅諸弟論といった具合に、必ずしも個別的に論題をもうけて論述がなされていたとは考えられない。察するに、嚴可均は「通典」「文苑英華」「資治通鑑」にとどめられているかなりまとまった裴子野の論述を、「宋略」に屬しているものとみて、その内容に従って、便宜的に題名をつけて收めたものであらう。

今、ここで問題なのは、「文苑英華」が、「雕蟲論」と題して獨立させたものを含む「通典」の選舉の項所收の三條が、果して「宋略」の記事であつたかどうかにある。というのは、嚴可均がもつづいた「通典」の三條は、「裴子野曰——」「鴻臚卿裴子野又論曰——」「又論曰——」とあるだけで、なら「宋略」の記事であるという保證はない。しかし、「宋略」に屬するものとみなすべき確證がえられれば、當然、その内にふくまれる雕蟲論も、「宋略」の制作年代、即ち齊末四九〇年代に成立したものとみなさなければならぬ。

したがって、次の章では、「通典」の選舉の項の三條が、それと同内容の「資治通鑑」宋紀十五引用の二條と照合した結果、文獻學の上からみて「宋略」に屬する記事であること、さらに、その内の「又論曰——」の一條（雕蟲論）だけを採りあげてみても、その批評對象の選擇方法から判斷して、齊の末年にその制作をおかねばならぬということを経次實證してゆくことにする。

### c 雕蟲論の制作年代

所謂「雕蟲論」の制作年代を考證するにあつて、それが現存する最も古いテキスト、「通典」卷十六選舉の項の一條について詳細な検討に入るまえに、それと關連ある同書の卷十四・卷十六の選舉の項所收の他の二條の内容を、まず検討することにしよう。

「通典」卷十四選舉二所收の裴子野の論述は次のような内容、體裁となつてゐる。

裴子野曰く、人を官にするの難きは、先王之言うて詳かなり。居家に其の孝友を視、郷黨に其の誠信を察し、出入に其の志義を觀、憂難に其の智謀を取る。(中略) 其れ漢家に在りては、惟郡其の功能を積み、五府擧げて掾屬と爲して、之を朝に升し、三公其の得失に參じて、之を天子に奏す。一人の身にして、閱する所の者衆し。故に能く官は其の才を得、敗事有ること鮮し。魏晉は是を易んじ失う所弘多なり。(中略) 況んや今萬品千群、俄に一面を折め、庶僚百位専ら一司に斷ずるをや。是に於て蠶風遂に行われ、抑止すべからず。(中略) 孝武は曹を分ち兩つと爲すと雖も、之を周漢に歸す能わず。朝三暮四にして其の病愈々甚しきなり。

つぎに「通典」卷十六選舉四所收の裴子野の論述一條をあげる。

鴻臚卿裴子野又論じて曰く、書に云う。貴を貴ぶは、其れ君に近きが爲なりと。天下生れながらにして貴き者なし。是れ故に其の人に非んば何んぞ代族に取らん。(中略) 二漢に迄り、儒を尊び道を重んじ、朝廷州里、學行是れを先んず、名公子孫と雖も還布衣の土に齊し。士庶分つと雖も華素の隔てなし。晉より以來、其の流れ稍改るも、草澤の高士猶お清塗に廁る。降りて季年に及び、閔閔を稱う。

是れより三公の子は九棘の家に傲り、黃散の孫は令長の室をないがし蔑ろにす。轉た互に銖兩を争う。論ずる所は必ず門戸にして、議する所賢能なし。苟且の俗は傲慢の禍を成し、以て敦弘・退讓・厲徳・興化する所の道を非となす。(通典の記事はここで終るが、資治通鑑百二十八にはこれと重複する記事を収めており、それをみると次のような論述がつづいてゐる。)謝靈運・王僧達の才華輕疎なるを以て其をして寒宗より生じしむるも、猶お將に覆折せんとす。重ぬるに其の庇蔭を怙むを以てす。禍を召くは宜なる哉。

さらに、「通典」卷十六選舉四所收の裴子野の論述の他の一條は、「文苑英華」では雕蟲論にあたるもので、後に全文をあげ詳細に考察することにするが、これらの裴子野の論述三條は、いづれも官人選舉法と、それと關係ふかい門閥論、文章論を内容とするもので、體裁上からみると、漢代(或は古代)から必ず説きおこし、魏晉の轉換期を経て、とくに劉宋一代のそれらの問題の實態について、具體的且つ批判的にふれている點で共通している。つまり、劉宋一代にかぎって、宋の孝武帝が吏部尙書二人を置いて選舉にあたらせたものの、結果は朝三暮四の類いで、魏晉以來の官人選舉法の弊害が益々ひどくなつてきたこと(通典卷十四選舉二)、晉末以降門閥をたたえる風習が強くなり、劉宋時代でも門閥をたのみにして世に傲つた謝靈運・王僧達が非業の死を召いたこと(通典卷十六選舉四)、枝葉末節の修辭を競ひ、六經を輕視して情性の吟詠に狂奔する風習が、宋の大明年間にはじまつたこと(通典卷十六選舉四)と、もっぱら法策、實名、年號をあげて、具體的な批判の對象となしているところに、この論述三條の共通した特徴がある。しかも、これはけつして齊梁の時代には論及してないところから、この三條を、宋代の歴史を對象として制作された「宋

略」の記事の一環とみなすことも可能である。ところが、これが、あきらかに「宋略」の記事であるという確信を強める資料が別にある。通典所收の二條(「裴子野曰——」、「梁鴻臚卿裴子野又論曰——」)は、「資治通鑑」にそれと同内容の記事を収めていることは先にのべた。「資治通鑑」が引用した總ての書目、二百二十六冊參考書を調べあげたものに、宋の高似孫の「史略」(後知不足齋叢書第七函)四の通鑑參據書がある。そのなかに裴子野のものは「宋略」一冊だけがあがつてゐる。このことは、通鑑が裴子野の著書のうち、引用したものは「宋略」だけであつたことを意味している。高似孫はその生存年代からおしても、「宋略」原典をみて、通鑑引用の裴子野の文を照合していることはあきらかなので、この二條が「宋略」の記事であることは確實である。したがつてこの「通典」二條にすぐ連なつて「又論曰——」といふかたちで、でてくる論述一條も、その論旨の展開方法と内容が、他の二條と共通した性格をもつことから考へて、當然「宋略」の記事とみなすべきである。現在、この一條は「通典」で、次のような體裁で残っている。これは「文苑英華」では雕蟲論にあたるものである。

宋の明帝博く文史を好み、才思朗捷・常に書奏を讀み、號して七行俱に下ると稱せらる。國に禎祥及び幸讎の集い有る毎に、輒ち詩を陳べ義を展べ、且つ以て朝臣に命ず。其戎士武夫は則ち託請に暇あらず、課限に困しみ、買うに以て詔に應ず。是を以て天下風に向い人自ら藻飾し、雕蟲の藝時に盛んなり。

又論じて曰く。古は四始六義總じて詩と爲す。勸善懲惡王化焉に本づく。後の作者思ひ枝葉に存し、繁華蘊藻用いて以て自ら通ず。悱惻芳芬の若きは楚騷之が祖となる。靡漫容與は相如其の音を扣く。是れ由り弊に隨ひ影を逐うの儔、指歸を棄てて執る無く、賦詩

歌頌は百帙五車となる。蔡邕は之を俳優に等しくし、楊雄は悔みて童子と爲す。聖人作らざれば雅鄭誰か分たん。其れ五言の詩家を爲るは則ち蘇李出でしより、曹劉其の力を俾し、潘陸其の枝柯を固む。爰に江左に及び、彼の顔謝を稱へ、聲亮に箴論し、廟堂に取る無し。宋の初より元嘉に迄り、多く經史を爲む。大明の代、實に斯文を好み、高才逸韻頗る前哲に謝し、波流同じく尙び、滋として篤し。是れより閭閻の少年、貴游の總角は六藝を擯落し、情性を吟詠せざるなし。學ぶ者は博依を以て急務となし、章句を謂いて專魯と爲す。管絃に被むらすなく禮義に止まるに非ず。深き心は草木を主どり、遠き致きは風雲を極む。其の興浮にして其の志弱し。巧にして要ならず、隠にして深からず。其の宗途を討ずぬるに、亦有宋の遺風なり。季子は音を聆きて則ち輿國に非ずとし、鯉や室に趨くは必ずや敦からざる事有り、荀卿亂代の徵は文章の匿綵にありと言う有るが若きは、斯れ豈に之に近からんや。

これを、同内容の「文苑英華」の雕蟲論とくらべてみると、まず體裁の上に大きな相違がある。「通典」で「宋明帝好博文史——雕蟲之藝盛時、又論曰」までは、それ以下の、裴子野の論述が、いかなる情況の下にかかれるようになったかを説明する「通典」編者のまぐらがきにすぎないのに、「文苑英華」は、そこまでを、裴子野が書いた序文として獨立させ、雕蟲論并序としている。そして、「通典」では、「又論曰」となっているところを、「梁鴻臚卿裴子野論曰」にしている。「文苑英華」のテキストは、常識から考えても、自分で序を書いておいて、その後につづけて、自分で「梁鴻臚卿裴子野論曰」とあらたまつてから、本論の展開に入るといふ、まことにおかしい體裁となつてしまつている。

ところで、從來、雕蟲論の制作年代を考える人々は、この「文苑英華」の「梁鴻臚卿裴子野論曰」を手がかりに、それを推定している。

羅根澤氏は「中國文學批評史」のなかで、「裴子野の生卒は蕭統よりもはやい。だが雕蟲論は自ら梁の鴻臚卿と稱しているし、彼が鴻臚卿になつたのは、梁の大通元年で、つまり彼が死ぬ年の一年まえであり、裴子野の死後まもなく蕭統も死んでゐる。そうすれば、この雕蟲論の制作は或は蕭統が文選を撰んだ後であろう」と考證し、ほぼ、裴子野が鴻臚卿になつた大通元年（五二七）頃に、その制作期をおいてゐる。さらに朱自清氏も、その著「詩言志辨」において雕蟲論を引き、簡單ではあるが、「梁代、裴子野は雕蟲論をつくり、當時の詩人を彈劾攻撃してゐる」とのべ、梁代にその制作期及びその批判の對象を考えてゐる。

我が國にも、羅氏、朱氏よりも早く、鈴木虎雄氏は「支那詩論史」のなかで、「裴子野は蕭統と同時の人なり。彼は固と歴史家なり。嘗て雕蟲論を著して純文學を誹る。論の成りしは、蓋し大通元・二（五二七・五二八年）の頃ならん。（中略）子野の此の論は八宋の明帝が文武の臣に命じて詩を課するに、作る能はざるものあり。或は之を買ひて命に應ずる者あり。是に於て天下風に向い、雕蟲の藝時に盛んなり。故に之を論ず」といへり、然れども、論は蓋し梁の大通中に成れるものにして、或は借りて以て梁の武帝を誹りしか」と論じ、やはり大通年間の制作とみなし、宋代に假托されているが、實は梁の武帝がその批判目標であつたと考證している。このような説は、最近なお我が國の研究者にも踏襲されており、ほぼ定説となつてゐる。なかでも鈴木虎雄氏の宋代假托説はいかにも苦しい。

「文苑英華」が「梁鴻臚卿裴子野論曰」としたのは、「通典」の選

舉四で、唯單に「又論曰」となっている所謂雕蟲論にあたる一條のすぐまえに、引用される他の一條が「鴻臚卿裴子野又論曰」となっていることから、それを獨立させて雕蟲論とした場合、「又論曰」では恰好がつかないので、そうしたと思われる。それにしても、「文苑英華」「通典」などの類書に、△梁鴻臚卿裴子野▽とあるからといって、その官職の年代から、その制作年代を推定すること自體、非常に危険である。危険であることは、東洋史家の間ではすでに常識だといえる。例えば、「玉臺新詠」の編者が△陳僕射徐陵▽となつていたので、陳の時代にそれが編集されたと考えるのが間違つてゐる類いである。おむね、類書で引用される官名は、作者の最終最高の官位をつけるのが習慣となつてゐるので、まずそれに疑いをさしはさまねばならぬ。それに加えて、雕蟲論のように同内容のテキストが、「通典」「文苑英華」の二書に現存している場合、そのどちらのテキストに信憑性があるかが吟味されねばならぬ。

今、この二書を比較校勘してみると、兩者の措辭に、十三ヶ所の異同出入がある。そのうち、どちらの措辭でも意味が通じ、信憑性の吟味ができにくいものを除けば、問題になるのは、次の措辭である。

I 古者四始六義總而爲詩(通典)——古者四始六藝總而爲詩(文苑英華)

II 蔡邕等之俳優、楊雄悔爲童子(通典)——蔡應等之俳優、楊雄悔爲童子(文苑英華)

III 宋初迄于元嘉(通典)——宋初迄于元壽(文苑英華)

IV 荀卿有言、亂代之徵、文章匿綵(通典)——荀卿有言、亂代之徵、文章匿而采(文苑英華)

I の場合は、二書とも次につづく文章が、「既形四方之氣、且彰君

子之志、勸善懲惡、王化本焉」となつており、これはあきらかに、毛詩大序の「詩有六義焉、一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌。——謂之風。言天下之事、形四方之風、謂之雅。雅者正也。言王政之所由廢興也。政有小大、故有小雅焉、有大雅焉。頌者美盛德之形容、以其成功、告於神明者也。是謂四始、詩之至也。」をふまえていることはあきらかで、云うまでもなく、「通典」の四始六義の措辭がただしい。

II の場合は、蔡邕の「陳政要七事疏」という文章があり、このなかにある「作者鼎沸、其高者頗引經、訓風諭之言。下則連偶俗語、有類俳優」の部分に、典據するものである。「文苑英華」の「蔡應」の措辭では、蔡邕・應瑒ととれるが、應瑒の詩文には、「等之俳優」という類似語はみあたらない。又そのあとの句が揚雄悔爲童子となつてゐるところから、楊雄に對應して、やはり「通典」のように蔡邕とすべきである。「文苑英華」の蔡應は書寫の際の誤りで、これはとれない。

III の場合は、劉宋一代の年號に元壽という年號はない。これは宋初とあるから、當然元嘉でなくてはならず、ここでも「通典」の措辭のほうが、信賴性がある。

IV の場合は、荀子の樂記篇にある「亂代之徵、其服組、其容婦、其俗淫、其志利、其行雜 其聲樂險、其文章匿而采」の條りをふまえていることから、一見、「文苑英華」の「文章匿而采」のほうが、原典そのままで正しいと思われる。しかし、この裴子野の文章全體にわたり、典據の部分は、「蔡邕等之俳優」「楊雄悔爲童子」「季子聆音非與國」など、いずれも原典の措辭そのまま自分の文章に持ち込むことはせず、それを裴子野自身の文體のなかに溶解させている。これからすれば、むしろ、「通典」の「匿綵」のほうが、はるかに裴子野の措辭として信憑性がある。清の王先謙の荀子の注をみると、匿は隠と同じで



邪の意味であるとして、「文章匿綵」でこの前後の四言句のリズムを變えることなく、充分に荀子の原義はいかされたことになる。

これまでみてきたように、「通典」のほうは、「文苑英華」のテクストにくらべて、所謂雕蟲論の一條は頗る信頼性がおけるものと診斷される。要するに宋代「文苑英華」の編者は、先行する唐の「通典」を参照し、それを整理した痕跡があるが、その過程で寫書の誤りをおかし、「通典」のまくらがきを、裴子野自身の序文と受けとり、さらに、そのまくらがきの部分にある「雕蟲之藝盛時」から、「雕蟲論」なる題名をとりつけたのち、文章論として、「文苑英華」卷七百四十二の八論文の項に、李華の「質文論」等とともに收めたと思われる。この罪は大きい。

雕蟲論は漢代の詩觀を尙古思想の立場から規範として受けとり、その視點から六朝宋に及ぶ詩史を簡潔に展望し、つまるところ、劉宋一代の詩風に焦點をしぼり、批判的に論じている。このような論旨の展開過程は、「通典」の選舉の項所收の他の一條と共通性をもっており、その内容論旨の焦點から考えても、劉宋一代の時代史を對象とした史書「宋略」の一環とみなすのが適切であると思う。

そればかりではない。次にのべる理由からも、所謂雕蟲論の制作年代を、從來の定説のように、梁代にまで下げることは許されない。

雕蟲論を、「通典」所收の一條によってみてみるに、そのなかに、「大明之代、實好斯文、高才逸韻頗謝前哲、波流相尙滋有篤焉。自是、閭閻少年貴游總角、罔不擯六藝吟詠性情。學者以博依爲急務、謂章句爲專魯。淫文破典斐爾爲功。無被於管絃、非止乎禮義。深心主卉木、遠致極風雲。其興浮、其志弱。巧而不要、隱而不深。討其宗途、亦有宋之遺風也」という部分がある。ここには、宋の大明の時期以後

情性を吟詠する詩作が一般の流行となってきたこと、そしてその詩精神は、中國の傳統的な教養の骨格である君子としての志を喪失し、花樹風雲に目をむけて、一種の衰弱現象をきたしていることを批判している。このなかで留意せねばならぬのは、この衰弱現象について、「討其宗途、亦有宋之遺風也」といつていることである。これはあきらかに、大明期にはじまる詩精神の衰弱現象が宋以後に及んでいくとみているのだから、作者裴子野は、少くとも、宋と時代を接する齊の時代の詩風を念頭においていたことはまちがいない。この措辭は、この現象が宋朝一代に限られるものでなく、すでに齊朝にも及ぶものであることを意識しての、作者の發言である。にもかかわらず、裴子野は、この論述のなかで、齊朝の詩風にかぎって、その年號なり詩人なり、或は詩風の具體的實態なりをあげて、批判することをあきらかに廻避している。そして唯單に、「討其宗途、有宋之遺風也」という頗る暗示的なことばでぼかしている。

このことについては、當時の他の文學批評の論著にみられる批評對象の選擇原理に歸納すれば、そこに共通した法則を發見することができる。例えば、劉勰の「文心雕龍」であるが、この體系的にもっとも整備された批評書は、古代から晉宋に至るまでの文學の動向と實態について、縱横に分析しているが、その制作期にかかっている齊朝の文學は、あきらかに論評の對象からはずされ、分析批判ぬきの、頗るありきたりの頌めことばでぼかされている。<sup>(7)</sup>鍾嶸の「詩品」においても、これは對象が時代ではなく、詩人の品評であるが、制作期に存命した詩人は意識的に批評對象の選擇からはずされている。裴子野が「有宋の遺風なり」とだけいつて、當然論及されてしかるべき齊朝の詩風にたいする具體的批判をぼかしているのは、劉勰の「文心雕龍」

の場合とおなじく、「雕蟲論」が、現に作者裴子野がかかわっている時代、つまり齊朝に制作されたことをなによりも立證するものである。このように、雕蟲論の制作期を齊の時代におけば、鈴木虎雄氏のように、雕蟲論の内容を宋代の詩風に假托して、實は梁の武帝誹謗をねらった論であるとする、まことに無理な説を押し出す必要もなく、すむであらう。

結論としては、雕蟲論は、「通典」からみて、齊末四九〇年代に制作された「宋略」の一環をなす記事とみなされる確実性が強いこと、雕蟲論そのものの内容から推して、齊朝にその制作年代にかかつており、梁朝にまでその時期をさげることができないことがあきらかにされたことになる。したがって、梁の大通初年につくられたとする従来の定説はいずれも訂正される必要がある。そして、この制作年代が訂正されれば、六朝の文學批評論著の年代序列は變更を迫られることになり、いままで「文心雕龍」、「詩品」、「文選序」のあとにきていた「雕蟲論」が、もっとも早い時期のものとなり、逆に他の批評の論著に、なんらかの影響を與えてきたことを考慮せねばならぬのもまた必然である。<sup>(8)</sup>

#### d 范縝と裴子野

「宋略」が俄然時の知名士の賞讃をあびるようになった契起は、天監七年に差し出された范縝の上奏文であることは、すでにのべた。梁書によると、范縝は裴子野とまだ顔をあわせたことはなかったが、その行爲業績を聞き及んで推舉したと傳えている。それは事實であろう。しかしこの二人をつなぐ糸はすでにそれ以前から用意されていたといえる。それは、南史范縝傳をみると、次のような記事があるから

である。

永明中、魏氏と和親す。才學の士を簡<sup>ち</sup>び以て行人と爲<sup>な</sup>す。縝及び從弟の雲、蕭琛、琅邪の顔幼明、河東の裴昭明、相繼いで命を將<sup>おこな</sup>う。皆隣國に著名なり。時に意陵王子良盛んに賓客を招く。縝亦た焉に預かる。

この記事に出てくる裴昭明は云うまでもなく子野の實父である。おそらくは、このようなつながりのなかで、范縝は嘗ての僚友の遺子の著述を知り、その人柄をきくことになったのであらう。しかし、そのような私的關係のなかで發掘されたものが、推舉の上奏文という公的な手段で照明をあたえられたとき、范縝はみずからのなかで、僚友の遺子という私情を切りおとし、それを第一義の道に役立てようとしたふしがある。とすれば、この時、中書郎范縝は裴子野という無名の歴史家とおして、一層ふかく、その時代の政治と思想の状況にかかわりあつていったのではあるまいか。

梁の武帝が佛教を國教とする布告をおこなったのは天監の三年である。この三年ののち、つまり裴子野推舉がおこなわれる一年まえの天監六年、胡適氏の考證によれば、中書郎になつたばかりの范縝が佛教排撃の異端的論戰を展開することになる。<sup>(9)</sup>これがあの著名な神滅論争である。「神滅論」は、問答體の形式を用いて、ほとんど全篇をつうじて、人間の形體が消滅すると、その神もともにはろび去るといふ〈神滅の道理〉を説いているが、結末の一段に至って、猛然と僧侶が政治をそこない、佛門が俗衆をむしばむとのべ、その病因は人々が神は不滅だと信じ、地獄のくるしみを恐れ、僧侶のでたらめな言葉に誘惑されているからだとして、佛教の偽瞞性に鋭く迫り、あきらかに、佛教を國教と定めた權力體制に挑戦している。かつて范縝は齊の竟陵王の

幕下に招かれていたおり、あつい佛教信徒であった竟陵王が范縝にむかつて、君は因果を信じないが、どうして人間に富貴貧賤の差が具わるのかと問いかけたのに對して、人生は樹の花みたいなもの、同時に開いた花が風に吹かれて落ちるさい、茵席の上に落ちるものもあれば、糞溷のなかに落ちるものもあり、その際に貴賤の差が異なるだけであつて、いずれも偶然によるもので、因果なんぞどこにもありませんという意味の反論をおこなったことがあり、この時期からすでに范縝は無神論に立脚していた。その彼が、佛教が國教となることによつて、佛教と政治との間に俗情の結託がおこなわれ、兩者の墮落をまぬがれがたいとみてとつて、「神滅論」を根底として、俗情にまみれた僧門の腐敗ぶりを批判することになったのは、當然の歸結であつた。唯、齊の竟陵王の時代と、今度はすっかり事情が異つていた。范縝はこの時、佛教批判が同時に、國家權力にむかつての果敢な挑戦であることを意識せねばならなかつたからである。これを契起に、梁の武帝と大僧正釋法雲は、沈約など論客六十四人を動員し、神滅論批判を展開させることになる。それでも范縝は儒家の名理論の思想的立場を固執し、自己の論理をまげて、權力の側に屈伏することはなかつた。それ故に、その翌年、范縝が中書郎から國子博士に遷されるにあつて、自分の代りに、裴子野を推舉して、「家業は世々儒史、經籍に苑圍し文藝に游息す」る者として上奏に及んだのは、この論争がおこなわれた政治的・思想的情況と無關係であつたと思われぬ。

「神滅論」を發表した天監六年、范縝は中書郎の官位にあるが、これは流謫地、廣州から召還されて、復職せるもので、流謫の原因は天監二年、范縝の齊の時代からの僚友、尙書令王亮が廢せられて庶人になつた事件に、端を發している。南史王亮傳をみると、

四年（天監）、帝（梁の武帝）華光殿に宴し、讒言を求む。尙書左丞范縝起ちて曰く、司徒謝朓の徒は虛名を負うも、陛下之を擢ぶこと此の如し、前の尙書令王亮は頗る政體有るも、陛下之を棄つること彼の如きは、愚臣の知らざる所なりと。帝色を變じて曰く、卿更に言に餘りあるべしと。縝固執して曰めず、帝悦ばず、御史中丞任昉、奏に因り、縝の妄りに褒貶を陳ぶれば、請う縝の官を免ぜんことをと。詔可となす。

とある。その時の任昉の范縝彈劾の奏文は現存しており、それによると、范縝は「下に附して上を訕り、毀譽自ら口にする者」で、捨ては置けぬと彈劾し、このような曲學諛聞の官僚は即刻獄官に委ねて、法に従わせ、免官に處すべきであると奏上し、かくして、范縝はその年から天監六年に至るまで二年間、廣州に貶謫されることになる。しかも召還の年に、不敵にも、范縝は「神滅論」を發表しているのだから、その叛骨精神には驚くべきものがある。

ところが、この范縝は、裴子野を推舉した天監七年ののち、ほどなく死亡したとみられる（范縝の動靜を、天監七年裴子野推舉後、史書が全く傳えていぬところから、從來そのようにみられている）。范縝は佛教の徒である。佛教の名理論からみれば、佛教の因果論が横行し、俗衆・朝臣を惑わせ、まさしく梁の政體は危機的狀況に映つたと思われる。王亮事件、「神滅論」の發表こそ、彼の危機意識を裏書きするものであつた。「神滅論」が權力の側から包圍攻撃をうけ、孤立無援の狀態におちいつているとき、彼は自分の生命の火が終末に至ろうとしていることに、あるいは氣付かねばならぬ肉體的條件にあつたとも考えられる。その時、彼が自己の精神的後繼者として、子野を推舉したという推定は、あながち不當な憶測ではあるまい。

范縝にとつては、王亮事件、神滅論々争につづいて、裴子野推舉の上奏に及んだのは、彼の危機意識からすれば、一貫した論理の行爲化であつたと思われる。任昉は王亮事件で范縝を弾劾せる者として、沈約は范縝の神滅論の論敵として、いずれも權力の側に立つ曲學諛聞の顯官であつた。それに反し、任昉に恨みをかい、「宋略」において沈約の「宋書」の誤謬を指摘した裴子野の叛骨精神は、それがたとえ、無名の歴史家であつても、范縝の執念にもえるまなこには、梁朝の政治的、思想的危機の情況に對處するために、必要且つ貴重な存在として映つたであらうことは想像にかたくない。范縝が家業を儒史とする裴子野を推舉したことは、儒家の立場から當時の佛教萬能の情況に一つのくさびをうちこむための最後のプロテストであつた。

かくて、「宋略」が、梁の政界と學界に脚光をあびたとき、すでに四十歳という分別ざかりに達していた裴子野は、范縝の叛骨的な批判精神の後繼者として、自己のはたすべき使命を否認なく自覺せねばならぬところにおかれていたはずである。

### e 裴子野の文學觀とその文學集團

裴子野は、梁の朝廷で、著作郎掌國史に任ぜられると、暫くして、中書通事舍人を兼ね、ついで通直正員郎になつてゐるが、その場合も、著作郎及び中書舍人を兼任してゐる。

こうして中書舍人になつた裴子野を中核として、中書省の同僚があつまつて、南朝において、きわめて異色の「古體派」と稱せられる文學集團が形成されてゐる。梁書の裴子野傳、劉顯傳及び殷藝傳をみると、ほぼこの文學集團の構成メンバーと、その時期を知ることが出来る。

梁書劉顯傳に、

歩兵校尉に遷り、中書郎舍人故の如し。顯は河東の裴子野、南陽の劉子邁、吳郡の顧協と職を禁中に連ね、遽に相い師友す。時人之を慕はざるなし。顯の博聞強記、斐、顧に過ぐ。

とある。ここに「職を禁中に連ぬ」とあるのは、中書省の職務で机をならべていたことを指すのであらう。というのは梁書裴子野傳は、裴子野が、中書通事舍人になつてからの記事は、次のように云う。

子野は沛國の劉顯、南陽の劉子邁、陳郡の殷藝、陳留の阮孝緒、吳郡の顧協、京兆の韋陵、皆博く群書を極め、深く相い賞好す。顯尤も之(裴子野)を推重す、時に吳平侯肅勳、范陽の張纘、毎に墳籍を討論し、咸子野に折中す。

このなかに出てくる殷藝の傳記を梁書で調べてみると、天監七年から十年まで、彼が中書舍人であつたことが明記されてゐる。これから考えて、おそらくは天監十年の前後に、「古體派」の文學集團は形成されたとみられる。

梁書の裴子野傳、劉顯傳にあがつて來た構成メンバーの他に、梁書謝微傳によると、

(謝微は)除平詔議參軍に遷り、鴻臚卿、舍人(中書)故の如し。微と河東の裴子野、沛國の劉顯とは官友の善みを同じゆうす。子野嘗つて「寒夜直宿賦」をつくり、以て微に贈る。微は「感友賦」をつくり以て之に酬ゆ。

とあり、謝微も中書省の同官のつながりで、この文學集團に加わつてゐることがわかる。また南史阮孝緒傳をみると、唯裴子野と交わるのみであり、裴子野は之を吏部尙書徐勉に薦めたとあるが、梁書では、阮孝緒を隱逸傳にいれ、度々推舉されたが、生涯仕官することはない高逸つたという。阮孝緒と裴子野はたがいに權勢に媚びることのない高逸

な氣格に、通じるところがあり、阮孝緒は裴子野との交友をとおして、中書省の劉顥、劉子邁、殷藝、顧協、韋陵、或いは謝徵と、文學や典籍について論じあう機會をもつたものと思われる。

これらの文人、學者で構成された文學集團にたいして、「古體派」なる呼稱がつけられるが、この呼稱にはそれなりの根據がある。梁書の劉之遴傳をみると、

之遴好く文を屬り、多く古體を學ぶ。河東の裴子野、沛國の劉顥常に共に書籍を討論し、固より交友を爲す。是の時、尙書、禮記、毛詩には、高祖（梁の武帝）の義疏有り。惟春秋左傳のみ尙闕く。之遴乃ち春秋大義十科、左氏十科、三傳同異十科合せて三十事以て之を上す。高祖大いに悦ぶ。

とあり、所謂「古體派」の呼稱は、ここに胚胎しているが、その「古體」の内容はこの記事から、經典の古文重視と關係があることがわかる。

この際あわせて、問題になるのは、「古體派」文學集團の中心人物。裴子野のイデオロギーであるが、その思想の文學的投影は、ほぼ「雕蟲論」につくされているとみてさしつかえあるまい。「雕蟲論」は漢代毛詩の詩説をそのまま踏襲するもので、四方の氣風を反映し、君子の志をあきらかにすることに、詩表現の目的を求め、勸善懲惡、王道教化の効用性を説くもので、今みるかぎり、頑固な文學復古説の提唱にすぎない。これは、もともと、春秋左傳を規範と仰ぐ歴史家の文學論であることから考えれば、これは當然の發想である。しかし滔々たる六朝文學の主情主義の流れのなかにあって、洗練された華麗な修辭學を全面的に否認するイデオロギーであり、しかも、簡文帝が、謝靈運と共にその文學存在を無視できなかったように、梁代の文壇にかな

り大きな影響をあたえていること、さらに、梁代初期にあって、「古體派」と稱せられる「文學集團」の理論的支柱となっていたことなど、考えあわせれば、唯の頑固な復古文學論の再登場として簡単に看過せないものがある。

「雕蟲論」の發想の基盤が、毛詩の詩教化説、蔡邕の文學者俳優説、楊雄の文學童子説にあることはあきらかで、この發想自體に人をひきつける魅力もなければ、少しの鮮妙な味もない。ただ、この發想から繰り出されてきた宋の大明以後の詩風批判の論理はきびしく、當時の文學のもつ一面の脆弱な性格を見事にえぐっている。八六藝を擯落して情性を吟詠せざるなし、學ぶ者は博依を以て急務となし、章句を謂いて專魯となし、淫文典を破るべしとけし、其の興浮にして其の志弱し、巧にして要ならず、隱にして深からずと批判し八興國の音に非ず八亂代の徵か八と訴えるとき、當時の文學が、ひたすら花鳥風月或いは山水園遊のなかに埋没し、對象を寫す表現技巧が精緻になればなるほど、喪失されてゆく八人間の回復が、ここで切望されており、そこに裴子野が時の文學者の共感を獲得して、「古體派」なる文學集團を形成し、反撥と憧憬を含む、かなりの強い影響を同時代人及び後世の人々にあたえるだけの理由があったと思われる。梁書裴子野傳では、裴子野の文體にふれたつぎのような記事をさげすことができる。

子野、文を爲るに典にして速。麗靡の詞を尙ばず。其の制作多く古に法り、今文の體と異なる。當時、或は詆訶る者有るも、其の末に及びては、翕然として之を重んず。或ひと其の文を爲ることの速きを問えば、子野答えて云う。人皆手に成るも、我獨り心に成ると。

（一九六八・三・三〇脱稿）

- 註(1) 梁書裴子野傳に「樂安任昉有盛名、爲後進所慕、遊其門者、昉必相薦達。子野於昉爲從中表、獨不至、昉亦恨焉。」とある。
- (2) 南史任昉傳にも、「遙(任昉の父)妻河東裴氏高明有德行」と記す。南史裴子野傳に「其(宋略)敘事評論多善而云、沈約謝之、歎其述作曰、弗遠。」とあり、「史通」卷十二古今正史の項にも、沈約謝して以來、宋史を語る者はもつぱら裴氏の宋略が沈氏の宋書より上だと評價するようになったとのべている。
- (3) 「史通」卷一、六家の項に「左傳家者其先出於左丘明、孔子既著春秋而丘明授經作傳——至孝獻帝始命荀悅、撮其書爲編年體、依左傳著漢紀三十篇。自是每代國史皆存斯作起。自後漢至於高齊、如張璠・孫盛・干寶・徐賈・裴子野・吳均・何之元・王邵等其所著書、或謂之春秋、或謂之紀、或謂之略、或謂之典、或謂之志、名各異、大抵皆依左傳・以爲的準焉。」とあることから、「宋略」が編年體の史書であつたことがわかる。
- (4) 「宋史」藝文志に「宋略」二十卷の記載が残っており、宋の高似孫は當然「宋略」原典をみて、「資治通鑑」引用の「裴子野曰——」の箇所が「宋略」の記事であることを確認した結果、その著「史略」の「通鑑參據書」に「宋略」一冊をあげたことになる。
- (5) 羅根澤著「中國文學批評史」(古典文學出版社)一三五頁。  
朱白清著「詩言志辨」(古籍出版社)三五頁。
- (6) 鈴木虎雄氏の「支那詩論史」第四卷齊梁時代、八七一—八八頁。最近「中國中世文學研究」第六號所收の森野繁夫氏の「梁の文學の遊戲性」と題する論文にも、從來の定説を踏襲して、「梁鴻臚卿裴子野論曰」を手がかりに、梁の大通元年(五二七)——中大通二年(五三〇)の間に、雕蟲論が成立したとみている。しかも梁代遊戲性文學の批判資料としてこの雕蟲論をとりあげているのは、方法的に餘りに恣意的である。
- (7) 最近、張殿氏の「劉彥和身世考索」(大陸雜誌語文叢書、文學上)は、劉勰が齊梁の人であるけれど、「文心雕龍」ができたのは、齊末の時期とする理由としてあげたなかで、「彦和論文 自上書三代、以至劉宋、文中但舉代名、而於齊則加「皇」字、是爲五十篇中所僅見者。(一)論各代君臣、有保有貶、獨於有齊一代、則讚揚有加」となし、その制作年代を齊末でなければならぬとしている。「雕蟲論」の制作年代を考える際、張殿氏があげた理由は参考になると思われる。
- (8) 拙論「漢魏六朝文學論に現れた情と志の問題」(目加田誠博士還曆記念中國學論集)と「文心雕龍文學原理論の諸問題」(日本中國學會報第十九集)のなかで、「雕蟲論」が「文心雕龍」及び「詩品」に及ぼしたと思われる影響の一端についてふれている。
- (9) 胡適氏の「考范縝發表神滅論在梁天監六年」(文史週刊三五期)に依る。
- (10) 南史范縝傳に「子良精信釋教而縝盛稱無佛。子良問曰君不因果、何得富貴貧賤。縝答曰人生如樹花、同發隨風而墮、自有拂簾幌墜於茵席之上。自有關籬牆落於糞溷之中。墜茵席者殿下是也。落糞溷者下官是也。貴賤雖復殊途、因果竟在何處」とある記事を参照。
- (11) 梁書王亮傳に任昉の「奏彈范縝」を收む。
- (12) 侯外廬「中國思想通史」第二卷「范縝神滅論的異端體系與戰鬥業績及影響」のなかで、「天監六年(五〇七) 神滅論發表」として、その備考で「縝の卒年はわからないが、この後(神滅論發表後) 事蹟が皆記載されていないので、恐くは卒年も此の後まもなくであろう」と考えている。ここで「この後の事蹟が皆記載されていない」とあるが、梁書裴子野傳に引く范縝の推挙上奏文は、時に裴子野年四十と明記しているの、范縝が上奏文を出したのは裴子野の卒年(六十二歳、中大通二年、五三〇)から逆算すれば、天監七年(五〇八)となる。従つて「この後の事蹟の記載」は史書にあるわけ、この點侯外廬の「范縝生卒舉行略

表」は訂正されねばならぬ。

また、朱東潤氏の「中國文學批評史大綱」（古典文學社）の三八頁において、「雕蟲論」の制作年代を、ほぼ「宋略」ができた齊末の時期とみており、その限りでは唯一のものだが、單なる推測の域に終っており、その理由となるべき綿密な考證は全くなされていない。しかも、范縝の裴子野推舉の上奏文提出期を誤算して、天監二年と間違えているところからくる推測で、これもまた訂正を要するものである。

(19) 南史阮孝緒傳の「唯與比部郎裴子野交、子野薦之尙書徐勉」の記事を参照。